2018 年度『日本語教育』論文賞 受賞論文

「心の拠り所」としての日本語
―香港人青少年学習者による日本語学習のエスノグラフィー―〔研究論文〕

掲載号：『日本語教育』169 号（2018 年 4 月発行），pp. 1-15

執筆者：野村和之氏（香港中文大学）・望月貴子氏（香港浸会大学）

【授賞理由】

本論文は，点数至上主義の競争文化を持つ香港において，青少年がどのように日本語を学んでいるかをエスノグラフィーの手法により分析したものである。「日本語を学ぶ」ということが，抑圧的文化を相対化しうる「対抗的アイデンティティ」構築の要因となっていること，一方で日本語学習者同士のコミュニティの中にも，文化的知識・新情報の入手速度などをめぐる競争意識が見られ，抑圧的文化から完全に自由ではいられないこと，などを極めて説得力のある筆致で活写している。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

日本語教育とは，単に言語形式の習得支援のみを事とするだけでなく，「心の拠り所」，つまり自らのアイデンティティを支える場として機能し得ることを示すとともに，指導者には「社会文化的文脈を理解しつつ学習者一人ひとりのアイデンティティを尊重する姿勢」を求めている。「すぐに役立つ示唆」を求めがちな日本語教育関係者に対し，「教育にとって本質的な示唆とは何か」についての根源的な問い直しを迫っている。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

本論文は，限られた紙幅の中で極めてセンスよく発言内容やエピソードを抽出・提示しており，香港の青少年の状況や思いが手に取るように読み取れる。本論文は，日本語教育の文脈でエスノグラフィー研究を行う際の好モデルとなり得ている。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

本論文で得られた知見を，香港という環境における特殊事例としてのみ捉えるのでなく，より普遍的な文脈における転移可能性についても今後の課題として視野に入れている。さらに，ひとがいかにして「心の拠り所」を得ていくことができるかということは，日本語教育のみならず，教育・福祉・医療等，人間に関わる研究分野に等しく関わるテーマであり，この論文の訴えが届けられるべき先は極めて広い。

以上

受賞論文 要旨

「心の拠り所」としての日本語
―香港人青少年学習者による日本語学習のエスノグラフィー―

点数至上主義の競争文化で学歴が社会的威信に直結する香港では，学校が強い影響力を持ち，学校での競争で優位に立てない青少年は抑圧や劣等感に晒される。本稿はエスノグラフィーの手法で香港人青少年の日本語学習を社会文化的文脈に絡めて分析し，青少年学習者にとって，日本語学習が学校での抑圧から逃れるための「心の拠り所」（safe house）として機能していることを明らかにする。香港において日本語は大学入学資格試験の選択科目になるなど十分な威信を持ち，学校内外での日本語学習は青少年が学校からの抑圧への「対抗的アイデンティティ」（subversive identity）を構築する基盤となっている。その反面，心の拠り所となるはずの日本語学習も香港の競争文化と無縁ではない。香港で広く普及するSNS を媒介した青少年学習者同士の繋がりの中にも，言語能力・文化的知識・新情報の入手速度などをめぐり，学校での競争と共通した優越感と劣等感のせめぎ合いが存在している。

Japanese as “Safe Houses”:
An Ethnography of Adolescent Learners of Japanese in Hong Kong

NOMURA Kazuyuki and MOCHIZUKI Takako

Hong Kong is characterized by a grade-oriented, highly competitive educational culture and a direct link between academic credentials and social status. Schools in Hong Kong have an enormous impact on adolescents’ lives, and those who cannot claim supremacy over their peers are subjected to powerful pressure and a sense of inferiority. This ethnographic study thus analyzes adolescent learners of Japanese in relation to Hong Kong’s sociocultural contexts. It is shown that learning Japanese functions as pedagogical safe houses in which adolescent learners can take shelter from the pressure of their school lives. Japanese is an elective subject in the university entrance examination and has attained the status of a prestigious language in Hong Kong. Consequently, Japanese allows those adolescent learners to adopt subversive identities to escape from pressure. Even so, learning Japanese is not unrelated to Hong Kong’s mainstream competitive educational culture. Through SNSs, adolescent learners of Japanese tend to vie with each other for language proficiency, cultural knowledge, and speed of obtaining new information.

（NOMURA: The Chinese University of Hong Kong, MOCHIZUKI: Hong Kong Baptist University）